

京都大学工学部	学生員	○玉井 瑛子
京都大学大学院工学研究科	正会員	山口 敬太
京都大学大学院工学研究科	正会員	久保田 善明
京都大学大学院工学研究科	正会員	川崎 雅史

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

都市の広場は、良好な都市景観・環境の形成，防災性の向上，豊かな地域づくりに資する交流の創出など様々な機能を有するオープンスペースとして重要な役割を担う。民間の遊園地や文化レクリエーション施設が縮小される中で公共の広場や公園の意義は一層高くなっている。

本研究では、文化施設が集積する京都北山の資料館敷地を対象として、隣接する景観と文化地区に相応しい都市広場の基本イメージを探求するために、景観設計のシミュレーションを展開するものである。

1-2 対象地の概要



図1. 京都府・北山地域

京都の北山地域(図1)は、1990年代、平安京建都1200年記念事業に向けて、京都コンサートホールや陶板名画の庭などの意匠的に特化した文化施設が建設され、歴史的なイメージとは対照的に都会的な新しい街として特色づけられた。しかし20年が経過した現在は、建物の更新期を迎え、北山地域全体の商業の活性化も期待されている。そこで京都府は、北山地域を「北山

文化環境ゾーン」と位置付け、連携協定(2009年締結)を結ぶ3つの府立文化施設(府立総合資料館・府立植物園・府立大学)を軸に「京都の文化・環境・学術の拠点」として整備検討¹⁾を行なっている。本研究では移設更新が予定されている総合資料館の敷地を対象に、新たな広場の基本イメージを提案する。

2. 設計イメージの抽出

2.1 景観要素の分析

初めに、主要な景観要素の抽出を行った。現地調査によって風景の核と言える既存の景観要素を抽出したところ、山の景色や緑の多さ、石やコンクリートといった彩度の低い素材の使用が特徴として抽出できた(図2)。

さらに、コンピューター画像上で、Google Earthの3Dデータを基に遠景を含む当該敷地からの景観再現を次元ソフト(Google SketchUp)によって行い、景色予測を行った。その結果、主要な景観として比叡山の山並みが印象的に移る景観が明らかになり、山への眺望を活用した景観設計を展開することになった。



図2. 既存の景観要素



図3. 敷地の景観再現

2.2 設計イメージの特定

北山の景観要素として抽出した山に着目し、「街に山の景色を再生する」というイメージコンセプトを特定した。鴨川や植物園の自然の緑の連携を育むと共に、山を媒体として地域の再興を目指し、オープンスペースにおける山への眺望を重視することで、街なかでも自然を身近に感じられる憩いの場を創造する。

3. 設計案の展開



図3. 設計案平面図



図4. 模型によるイメージ提案

前章までの事項を活かし、設計イメージの提案を行った(図3)。

3.1 景観資源の活用

景観分析より、対象地においては比叡山への眺望が主要な地域資源の一つと考えられる。本研究では比叡山の眺望を強化することにより、地域の景観資源を媒体として人々に眺望や景観イメージの関係性を生むことを提案した。具体的には、以下の3点に留意した(図4)。

- ①山の景色を強調する視点場の創出
- ②敷地外から見た”山”の創出
- ③遠景の見切りとしての地形・植栽

これらによって、地形や植栽配置をデザイン決定し、山の眺望を強調した。

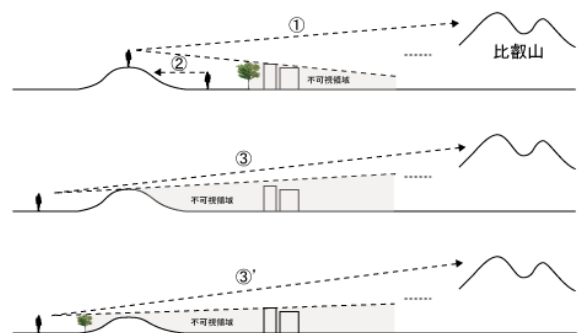


図4. 地形と植栽の考え方

4. おわりに

景観の調査分析に基づき、地域の景観資源である比叡山の山並みの眺望に着目し、自然の緑をつなぐ景観体験のできる都市広場の提案を行った。対象地周辺の調査と景観分析の結果、文化環境ゾーンとしての特色を新たに抽出することが可能となった。すなわち、設計におけるコンセプトイメージを「街に山の景色を再生する」と定め、自然の緑を連携し、強調する設計案をシミュレーションとして表現した。

今後は、設計された場所の維持管理調査や人々のモニタリングによって、空間のしつらえとそれによる人の行動パターンに関する分析を行うことで、オープンスペースの設計に関する知見をさらに深めることができると考えられる。

1) 京都府、『北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告』, 2009年10月